



待降節第 1 主日 (マタイ 24:37-44)

今を大事に生きることが来臨の日の備えになる

待降節第一主日、三年周期のA年に典礼が変わりました。直前に待っているのは主の降誕ですが、「救い主を待つ」という大きなくくりで考えると「キリストの再臨を待つ」という意味合いもあります。「主を待つ人」の姿を福音朗読から探し求め、私たちの準備に当てはめることにしましょう。

待つことの素晴らしさを、今回ほど味わった年はないでしょう。私たちは教皇フランシスコの来日が正式に発表されてから二ヶ月間、どれだけ楽しみにして待ったでしょうか。教皇様のために祈り、折り鶴を用意し、聖ヨハネ・パウロ二世教皇の訪日の様子を思い出し、一日千秋の思いで待ちました。

そして待ち望んだ当日は、最も心配していた雨でした。台風のなごりである温帯低気圧がいたずらして、朝方はほとんどの人が天気を恨んだはずですが、仕方ないという気持ちで県営野球場に入ったはずですが、最後の待ち時間に奇跡が起きました。待ち望んでいた、もしかすると諦めていた絶好の日和になったのです。

私たちは聖ヨハネ・パウロ二世教皇を「大雪をもたらした教皇様」と記憶していると思います。今回の教皇フランシスコはどのように記憶されるでしょうか。私は県営野球場でのミサが始まるまでは、「お目にかかるまでに本当に苦労させられた教皇様」として記憶に残ると考えていました。

ところが、実際は私の予想をはるかに超えて記憶に残る教皇様となったのでした。誰もが諦めかけていた悪天候を吹き飛ばし、天を恨んだ私たちの思いをくつがえし、感動を与えてくださったのです。

もし雨降りの中で教皇様が県営野球場に現れていたなら、「やっと来たか」で終わったかも知れません。ですが実際はどうでしょうか。それまで雨に打たれて寒い思いをしたこともすっかり忘れ、疲れて座り込んでいたのも忘れて、立ち上がって遠くからでいいからお姿を見たい、私が手を振っている姿を届けたい。そんな気持ちになったのです。一瞬で、すべてが塗り替えられたわけです。

司祭団にもどよめきが上がりました。教皇様がミサをささげる祭壇の左右に司祭団席が設けられていましたが、祭壇右側はすでに強い日差しに照りつけられ、汗が出ていました。「暑いなあ」「まだかなあ」と思って待っておりました。それでもおいでになった瞬間、立ち上がってお姿を見つけようと人々の視線の先を追いかけたのです。「持っている人は違う！」そんな印象を持ちました。これほど、「待った甲斐があった」と感じた瞬間を、私は思い出すことができません。

県営野球場にいる参加者はすべて、「今日ここに、教皇フランシスコがおいでになる」とはっきり理解しているわけです。それでも、雨が降り、やきもきして、すっかり天気になり、教皇様のお姿を見た瞬間、

今日集まっている喜びを噛みしめたのです。当然お目にかかれる方ですからこの通りです。私たちが待降節を通して待つ救い主は、どれだけ待っても待ちすぎるということはないのです。今年のクリスマスのために、教皇フランシスコは「待つ喜び」「待つことの価値」を、はっきり教えてくださったのではないのでしょうか。

「だから、あなたがたも用意していなさい。」(24・44) 福音朗読は用意していなさい、準備を怠ってはならないと呼びかけています。二つの用意を考えました。一つは、おいでになる方の力と権威を全面的に認めることです。幼子としておいでになるお方は、命を狙われても命を落とすことなく、死を前にして絶望する人に希望をお与えになる方です。私たちのもとにおいでになる時、待ち望んだことを必ず与えてくださる。その力と権威を率直に認めましょう。これが一つ目の用意です。

もう一つは、救い主を待つ日々は、一日も無駄にはいけないということです。あと一日無意味に過ごして、それから救い主の準備に取りかかろう。ノアの洪水の時にどうなりましたか？人々は準備を怠り、一人残らずさらわれたと書かれています。あなたは「今日不注意なことをしても、明日仕事を取り上げられることはないだろう」と言うのですか。どこにもそんな保証はありません。「人の子は思いがけない時に来る」(24・44) のです。

救い主を待つ待降節を迎えました。今日一日無駄に過ごして明日から待降節に入るとか、神を試すようなことは一切考えないことです。すべての始まりと終わりをつかさどる方がおいでになります。「あなたは今日で終わり」と言われても、何も反論できない方を迎えます。その方のために一日も無駄にすることなく、「目覚め、わきまえ、用意して」救い主を待ち続けましょう。

待降節第2主日(マタイ 3:1-12)